

第6学年 国語科学習指導案

平成30年2月2日（金）第5校時

- 1 単元名・教材名 登場人物の関係をとらえ、人物の生き方について話し合おう
『海の命』

2 児童の実態と本単元の意図

(1) 児童の実態

本学級の児童は、読書が好きな児童が多く、朝読書をはじめ、時間があれば進んで読書をしている。学校の取り組みである「読書マラソン」や「読書スタンプラリー」では、意欲的に取り組む姿が見られた。また、今年度より始めた辞書引き学習により、多くの言語に触れる機会を設けている。それによって、個々の実態に合わせて語彙を増やすことができている。

国語授業に関しては、一学期の「カレーライス」の学習では、自分の経験と重ね合わせながら、登場人物の心情を理解したり、場面が進むごとに変化する主人公の心情の変容を読み取ったりした。二学期の「やまなし」の学習では、五月と十二月を対比して読み進めた。毎時間一文まとめをし、作者が伝えたいことを理解した上で、自分の感じたことを朗読で発表するという学習を行ってきた。また、国語科に限らず、ペアやグループで交流し意見を交換する経験を多くしてきている。

(一部省略)

(2) 好き嫌い調査

(省略)

(3) 教材観

高学年の児童は、中心人物の心の揺れ動きに寄り添いながら、人物相互の関係や心情を読み取る学習を繰り返し行ってきた。こうした経験を踏まえ、「海の命」では自然を舞台に、主人公「太一」が成長する過程を、登場人物との相互関係を捉えながら読み取っていく。

「海の命」は、6つの場面で構成されており、「太一」の成長に沿って、物語が進行していく。それぞれの場面において「太一」の成長に関わる登場人物の言葉や生き方が描かれ、その影響を受けながら、「太一」が「海」やそこに住まう魚や人間の在り方を深く見つめ、自分の生き方を決めていく物語である。

第五場面で、「太一」は父の仇である瀬の主を殺さなかった。瀬の主を殺して一人前の漁師になること、父の仇を討つことが夢であったにもかかわらず殺さなかった。それは、「海のめぐみ」「千匹に一匹」という「父」「与吉じいさ」の言葉から、海に生かされている、海と共に生きているという教えを理解したからである。併せて、太一の考える「一人前の漁師」と「父」「与吉じいさ」が教えてくれた「村一番の漁師」の違いを理解したからである。この葛藤場面で成長する「太一」の心情を読み取らせることで、卒業を控え

た6年生児童に、人との関わり大切さや、命の意味や価値を考えさせることにつなげることができる教材である。

(4) 指導観

児童が主体的に学ぶ授業を実践する上で、学習することへの「必要感」をもたせることが大切である。教師主導で単元を進めてしまえば、「必要感」は生まれない。「海の命」で何を読み取りたいかを児童自身から引き出し、そこに向かう学習計画を児童自身が考えることで、毎時間の必要感が生まれるものだと考えた。

「海の命」の山場は、第五場面の「太一」が瀬の主を殺さなかった場面である。「太一」は、周囲の人間の言葉や自分の夢など、様々な思いから葛藤する。この時の「太一」の心情を理解することができるように、第一場面から第四場面の読み取りをする必要がある。本授業では、第一時に山場である第五場面の「太一」の心情を考えさせる。読みの浅い児童たちは、殺さなかった理由を深く理解することはできない。第五場面の山場を読み取りたいという思いを第一時に抱かせ、山場を読み取るための学習計画を児童と共に考え、第二時以降の学習に必要な感をもたせていく。

第五時では、「海の命」が読者に伝えたかったことは何かを考えさせる。「海の命」を通して、卒業を控えた6年生児童に、人に支えてもらいながらここまで成長してきたことや、自他の命の意味や価値についてまとめ、主題である人物の生き方について話し合えるようにしていきたい。

3 研究主題との関わり

(1) 研究主題

「学力・体力の向上と豊かな心を育成する小中一貫教育の推進」
～ 基礎基本を身につけ、読み取る力の育成を目指す国語授業の研究 ～
目指す児童像 「読み取る力を身につけ、意欲的に学ぶ子」

(2) 研究の仮説

仮説Ⅰ 松之木スタンダードを活用し、個人で考えたり、他の児童と交流したりすることで自分の考えを深めることができれば、読み取る力が身につけ、意欲的に学ぶ児童が育つだろう。

仮説Ⅱ 多くの言葉にふれるような学習環境を整えることができれば、語彙力が高まり関心意欲を高めることができるだろう。

(3) 仮説に迫るための手立て

① 仮説Ⅰに迫るための手立て

○松之木スタンダードの活用

八潮スタンダードを基にして作成した国語科における松之木スタンダードを活用

し、今は何をやる時間なのか、どのように取り組む時間なのかを児童と教師で共有する。1時間の学習の流れを「つかむ・見通す」→「考える」→「深める」→「まとめる」とする。各過程での児童の活動や指導の留意点は以下の通りとする。

1時間の流れ	指導内容	指導上の留意点
つかむ 見通す	○活動計画から本時の活動内容の確認 ○単元を貫く言語活動の確認 ○めあての確認	・前時の学習内容の振り返りをする ・既習事項の確認をする ・活動への意欲付けを図る
考える	○めあてを意識して読む（音読する） ○自分の考えをもつ	・考えるポイントを明確にする ・叙述に沿って（根拠を明らかにして）考えをもたせる
深める	○ペアやグループで意見を交換する ○全体で共有する	・話合いの視点を明確にする ・友達の考えと自分の考えを比較させる ・必要に応じて自分の考えを修正させる
まとめる	○めあてに対する本時のまとめをする ○振り返りの音読をする ○振り返りをする ○単元を貫く言語活動との関連付けをする	・まとめはできる限り子どもに考えさせる ・めあてとまとめがつながるようにする ・次時の予告をし、意欲付けを図る

○音読指導の充実

「考える時間」や「まとめる」の時間に音読指導を行う。低学年は「口を大きく開ける」「つかえない」、中学年は「強弱をつける」「句読点に気をつける」、高学年は「気持ちを含める」ことを観点とし、系統的に指導する。

また、音読の系統性を意識した音読カードを作成するとともに、音読検定を学期に1回以上実施して、音読に関する評価を行う。

②仮説Ⅱに迫るための手立て

○国語コーナーの作成

言葉に関心をもつことができるような掲示物を作成し、2階通路に掲示する。多くの児童が教室移動の際などに興味をもって見ている。1学期は興味をもたせる掲示物だったが、2学期は2年生の教材を使って物語文の読み取りの視点を明確にするための掲示物にし、目指す児童像に迫った。3学期は、語彙を増やすために言葉の宝箱を掲示する。

○基礎基本の時間および松之木タイムの取り組み

基礎基本の時間に言語に関する問題プリントを行う。松之木タイムでは、学期に1回以上音読検定を実施し、系統表に沿って直接評価する。また、高学年では辞書引きも行い、多くの言葉に触れることで語彙力を高めることができるようにする。

○ブックバックの活用

児童の語彙力を高めるために、本に今まで以上に親しむことができ、国語辞典も活用できるような学習環境づくりを行う。そのために、家庭の協力を得ながらブックバックを全児童に用意してもらい、わずかな時間でも読書ができるようお気に入りの本も入れるようにしている。また、3年生以上は常に国語辞典を出せるようにしている。

4 単元の目標

- (1) 作品に描かれている登場人物のつながりや心情を読み取りながら、主人公の生き方について自分の考えをもととしてしている。 (関心・意欲・態度)
- (2) 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉え、人物の生き方について自分の考えをまとめることができる。 (読むこと)
- (3) 人物の生き方についての考えを交流し、自分の考えを広げたり、深めたりすることができる。 (読むこと)
- (4) 物語の構成を理解している。 (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

5 単元の評価規準と学習活動に即した評価規準

	ア 国語への関心・意欲・態度	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	・作品に描かれている登場人物のつながりや心情を読み取りながら、主人公の生き方について自分の考えをもととしてしている。	・登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉え、人物の生き方について自分の考えをまとめることができる。 ・人物の生き方についての考えを交流し、自分の考えを広げたり、深めたりすることができる。	・物語の構成を理解している。
学習活動における具体的評価規準	①登場人物の生き方について関心をもっている。	①登場人物の会話や行動から、その人物の考えや生き方を捉えている。 ②会話文や地の文から、登場人物どうしの関係を捉えている。 ③登場人物の相互関係を捉えながら、瀬の主に対峙したときの太一の心情を捉えている。 ④交流により、考えを広げたり深めたりしている。	①時間の移り変わりをもとに、場面を分けている。

6 指導と評価の計画（全5時間）

次	時	○学習活動	・学習内容	評価規準（評価方法）
1	1	○「海の命」の全文を音読し、初発の感想をもつ。 ○学習課題を設定し、学習の見通しをもつ。	・初発の感想 ・山場を捉える ・学習の見通し	ア①（発言・ノート） オ①（ノート）
2	2	○「父」「与吉じいさ」の言動から、人物像やその生き方などを知る。	・「父」「与吉じいさ」の考え方	エ①（発言・ノート）
	3	○「母」「太一」の海への考え方の違いを知る。	・「母」と「太一」の考え方	エ②（発言・ノート）
	4 (本時)	○なぜ「太一」は「瀬の主」を殺さなかったのか考える。	・「太一」の葛藤	エ③（発言・ノート）
3	5	○「海の命」は、何を自分に伝えたかったのかを書き、まとめる。	・作者の意図のまとめ ・考えの交流	エ④（発言・ノート）

7 本時の学習指導（本時4／5時）

(1) 目標

登場人物の相互関係を捉えながら、瀬の主に対峙したときの太一の心情を捉えている。

(2) 展開

過程	学習活動	学習内容	○指導上の留意点 ◇評価 ★小中一貫教育の視点 (松之木スタンダード)	時間
つかむ・見通す	1 前時までの復習をする。	・キーワードの確認 「海のめぐみ」「千びきに1ぴき」 「村一番の漁師」「父のかたき」 等	★前時の学習内容の振り返り ★既習事項の確認 ○第1時にも考えた山場の読み取りであることを想起させる。 ○これまで学習してきた人物との関わりから、山場の心情を読み取ることを確認する。 ★活動への意欲付け	5分
	2 本時の課題を確認する。	太一が瀬の主を殺さなかったのはなぜだろう	★課題の明確化	

考える	<p>3 第5場面を音読する。</p> <p>4 太一の心の迷いを共有する。</p> <p>5 太一が何に迷って瀬の主を殺さなかったのか個人で考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・第5場面音読 ・心情の読み取り 	<p>★課題を意識して読む</p> <p>○瀬の主を殺すか殺さないかを迷っていることを押さえる。</p> <p>○叙述に沿って、箇条書きでまとめさせる。</p> <p>★自分の考えをもつ</p>	16分
	<p>◇登場人物の相互関係を捉えながら、瀬の主に対峙したときの太一的心情を捉えている。</p> <p>A これまで登場した人物との相互関係を捉えながら、瀬の主に対峙したときの太一的心情を捉えている。</p> <p>B 登場人物の相互関係を捉えながら、瀬の主に対峙したときの太一的心情を捉えている。 →父や与吉じいさから学んだこと、母の悲しみを背負うこと、本当の一人前の漁師と村一番の漁師の違いなど、さらに読みが深くなるように助言する。</p> <p>C 考えが書けない。 →ノートや板書、掲示物で前時までのポイントを想起させて考えさせる。</p>			
深める	<p>6 グループで交流する。 男女混合3～4名</p> <p>7 グループごとの考えを全体で交流する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表→交流→まとめ ・自分の考えを付け足し、修正 ・グループごとの発表 ・グループごとに考えの交流 	<p>○第1から第4場面の人物との関係を含めて考えさせる。</p> <p>○グループごとに太一の迷いを、まとめさせる。</p> <p>★話合いの視点の明確化</p> <p>★考えの比較・修正</p> <p>○各グループの発表会ではなく、考えを深めたり、修正したりできるような補助発問をする。</p> <p>○瀬の主を殺さなかったことで父や与吉の考え方や生き方を理解し、海の命の意味を知ることができたところまで押さえる。</p>	15分

まとめる	8 一文まとめをする。 「瀬の主を殺さなかったのは、()だから」	・ノートに一文まとめ	★まとめは児童が考える ○第1時の自分の考えと比較し、読みが深まったことを実感させる。 ○これまでの学習で、主題が達成できたことを押さえる。	9分
	9 振り返りの音読をする。	・第5場面の音読	○まとめたことが表現できるような音読(朗読)となるように助言する。	
	10 次時の予告をする。		○次時はこの物語が6年生のみなさんに伝えたいことは何だったのか考えて、海の命の学習を終えることを予告する。 ★次時への意欲付け	

8 板書計画

まとめ

深める

考える

つかむ

まとめ

太一が瀬の主を殺さなかったのは、()から。

水の中でふっとほほえむ

瀬の主から学んだ ↓ おとうと思えた
「おとう、ここにおられたのですか」
大魚は海の命

葛藤

- 父のかたきをうちたい
- 一人前の漁師になりたい
- (どんな魚でも捕れる)
- 海めぐみという父の考え方
- とちがうのではないか
- 千びきに一びきという与吉の考えと違うのではないか
- 本当の一人前の漁師とは、この魚を殺すことなのか

海
の
命
課題

○月○日

太一が瀬の主を殺さなかったのはなぜだろう

太一は何を迷っていたのだろうか